



竹田 英司

「寮長の中島健太です。竹田さん
つて、英語の先生だったんですよね
?。僕に英語を教えてください。お
金も払いますので」

桜満開の頃、これが初めてサンダ
ーズの選手と交わした会話だった。
当時はプレーオフの真っ最中。チー
ム全体に張り詰めた空気が流れ、さ
すがに鈍感な私でも、選手に声を掛
けることをためらっていた時期だっ
た。



中学・高校

英語の教材を手にする
中島選手

◎中島選手の向上心 感激

「お金は要らないし、喜んで教え
ますよ。チームのためになることな
ら大抵のことはやります」と答えた
ように記憶している。

話しながらひそかに、私は軽く感
動していた。選手は生活のほぼ全て
をバレーボールにささげている。眠
ること、食べることに、気分転換に出
かけること。全てが「バレーが上手
になるため、そして、チームが日本
一になるため」に日々行動している。
その選手から、休息時間を削って
まで「英語を学びたい」「外国籍の
監督や選手と英語で交流したい」と
いう希望を聞いて感動したのだ。

サンダーズの選手はみな超一流の
運動選手だが、生まれ持った才能だ
けでここまでこられたわけではない
のだな、このたゆまぬ向上心があれ
ばこそ、と実感した。

中島選手は、風貌がどことなくサ
ッカー日本代表の吉田麻也選手に似
ているな、と感じたので、人の名前
を覚えるのが苦手な私は、勝手に中
島選手を心の中で「マヤ」と呼んで
記憶した。連休中に大阪で開催され
る黒鷲旗全日本男女選抜大会後、マ
ヤ(ちなみに私の妻の名でもある)
ではなく、中島選手に英語を教える
日が待ち遠しい。(J-Tマネジャー)